

ISSN 2186-4284

**Recueil d'études sur
l'*Encyclopédie* et les Lumières**

『百科全書』・啓蒙研究論集

N° 1

mars 2012

Société d'études sur l'*Encyclopédie*

『百科全書』研究会

略号

SIGLES ET ABBREVIATIONS

- DPV Diderot, Denis, *Œuvres complètes*, éditées par Herbert Diekmann, Jacques Proust, Jean Varloot & al., Hermann, 1975 et suiv. 34 vol. prévus.
- Enc.* *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, Paris, Briasson, David, Le Breton, Durand, 1751-1765, 17 vol. in-fol.
- RDE *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, Paris, Aux Amateurs de livres.
- SVEC *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, Oxford, The Voltaire Foundation.

Le numéro des tomes est indiqué en chiffres romains, la ou les pages en chiffres arabes

「化学」を巡るフィロゾーフたちの戦い ——ルソーを中心にして——

淵田 仁

はじめに

本稿では、「化学 (chimie)」と哲学の関係について検討する。すなわち、当時のフィロゾーフたちが自らの哲学・思想体系を作る上で、「化学」がどのような役割を演じていたのかについて考察する。

しかし、この検討をおこなう前に、以下の問いに答える必要があるだろう。なぜ、化学なのか。そして、十八世紀の化学をひとつのディシプリン¹⁾とみなしてよいのだろうか。第一の問いについて答えるならば、本稿で明らかになるように、化学に対するフィロゾーフたちの知的好奇心の高さを挙げることができる。多くのフィロゾーフたちは化学の講義に参加し、理論を学び、実験をおこなっていた。第二の問いについては、B・バンソード＝ヴァンサンらの近年の諸研究の中にその一つの回答がある²⁾。これらの研究は、ラヴォワジエ (Antoine-Laurent de Lavoisier, 1743-1794) 以前の化学を再評価することを目指している。これまで、科学史においてラヴォワジエ以前の化学は錬金術と同一視され、固有のディシプリンをもたない〈非科学的なもの〉と見なされてきた³⁾。だが、近年のバンソード＝ヴァンサンらの研究はこのパ

¹⁾ 本稿では、ディシプリン (discipline) という言葉を、ある学問が他の隣接する学問と区別され、ひとつの自律した学問体系となるために必要な「対象」「規範」「制度」という諸要素の総体という意味で使用する。

²⁾ とりわけ、『コルピュス』誌の特集において、ラヴォワジエ以前の十八世紀化学を再評価する動きを見て取ることができる。Jean-Jacques Rousseau et la chimie, Corpus revue de philosophie, textes réunis par Bernadette Bensaude-Vincent et Bruno Bernardi, n° 36, Paris X Nanterre, 1999. La chimie et l'Encyclopédie, Corpus revue de philosophie, mis en œuvre par Christine Lehman et François Pépin, n° 56, Paris X Nanterre, 2009. Bernadette Bensaude-Vincent, Matière à penser. Essais d'histoire et de philosophie de la chimie, Presses Universitaires de Paris Ouest, 2008.

³⁾ 例えば、ギリスピーの評価が典型的である。「十八世紀の自然にたいする深い接近はまず化学からはじめられた。(中略)しかしここで断っておかねば

ースペクティブの修正に力を注いできた。すなわち、ラヴォワジエ以前の化学を固有のディシプリンを有する〈科学〉として根拠付けることこそが彼女らの研究のひとつの目標であった⁴⁾。

このような化学の再評価という運動のなかで、ルソーの『化学教程 *Institutions chimiques*』(1747年、以下『教程』と略す)は啓蒙の世紀のどこに位置づけられるのだろうか。デビュー作『学問芸術論』(1750年出版)以前のジャン=ジャックは、独学ながら、当時の化学を理論だけではなく、実験もおこない、学んでいた。その成果をルソーは1747年に『教程』としてまとめた。だが、これは生前刊行されることはなく、1882年にその手稿が発見されるまで、ルソーの知られざる著作であった。その後、1918年に『ルソー年報』にて『教程』が発表されたにも関わらず⁵⁾、プレイヤー版ルソー全集にも収められることはなく、幾つかの研究をのぞいて⁶⁾、ルソー研究の対象になることはなかった。1999年、ファイヤール社からの単行本⁷⁾が出版さ

ならないことは、それは今日の化学とはちがうということである。ラヴォワジエやプリーストリを論ずるときに扱う本格的な科学ではないということである」(傍点引用者)。チャールズ・C・ギリスピー、『客観性の刃 科学思想の歴史 [新版]』、島尾永康訳、みすず書房、2011年、115頁。

⁴⁾ Cf., Christine Lehman et François Pépin, « La Chimie et l'*Encyclopédie* : introduction », dans *La chimie et l'Encyclopédie, Corpus revue de philosophie*, mis en œuvre par Christine Lehman et François Pépin, n° 56, Paris X Nanterre, 2009, pp. 7-8.

⁵⁾ *Institutions chimiques*, dans *Annales Jean-Jacques Rousseau*, publié par Maurice Gautier, t. XII, 1918-1919 et t. XIII, 1920-21.

⁶⁾ Paolo Giannuzzi, *J.J. Rousseau e la chimica. Ricerche di storia della chimia dal Rinascimento all'illuminismo*, Adriatica, 1967.

⁷⁾ *Institutions chimiques*, texte revu par B. Bernardi et B. Bensaude-Vincent, *Corpus des œuvres philosophiques de langue française*, Fayard, 1999. 本稿では、ファイヤール版『化学教程』ではなく、2010年に刊行されたオノレ・シャンピオン版を用いる。引用する際は、IC と略記し、そのページ数を付す。*Institutions chimiques*, édition critique par Christophe Van Staen, Honoré Champion, 2010. よって、ルソーの『教程』には、三つの版が存在することになる(『ルソー年報』版、ファイヤール版、オノレ・シャンピオン版)。それぞれの版からは幾つかの異同が確認される。したがって、これらの版を用いて研究をおこなう際には、ジュネーブ大学所蔵の『教程』のマニュスクリプト (BGE Ms. fr. 238) を常に参照する必要がある。本稿で引用する部分に関しては、マニュスクリプトの検証をおこなったが、異同は確認されなかった。

れてから、『教程』の研究は急速に進展した⁸⁾。

このような状況を鑑みて、本稿ではルソーのこのテキストを同時代の中に位置づけることを目指す。それによって、ダランベールやドルバックといったフィロゾフたちやルソーの間で化学を巡ってどのような言説空間が存在していたのかという問題を検討することができるだろう。

1. 化学に対する眼差し

十七世紀末、物理学 (*physique*)⁹⁾ と比べ、化学に対する評価は非常に低いものであった。科学アカデミーの終身書記フォントネルは「明確、単純であり、見通しの良い」物理学に対して、反対に化学は「乱雑であり、曖昧な」ものだと思なしていた¹⁰⁾。この見方は、近年まで続き、十八世紀の化学はラヴォワジエの登場まで日の目を見ない学問だとみなされてきた。

だが、先ほど述べたように、ラヴォワジエ以前の化学の再評価が近年になってなされてきた。当時、化学の実験をおこなう公開講座には多くの人々が来ていたようである。例えば、ラヴォワジエ以前にパリにて化学の普及に努めたルエル (*Guillaume-François Rouelle, 1703-1770*) が王立植物園でおこなった公開講座にはのべ六百人以上の人々が参加した。それに加え、各貴族たちが私邸にて開催していた化学の私的講座も盛んにおこわれていた¹¹⁾。実際に、

⁸⁾ 『教程』において、とりわけ重要な研究成果をあげているのはブルーノ・ベルナルディである。『概念の工場 ルソーにおける概念の発明に関する研究』において、ベルナルディはルソーの思想形成における科学 *sciences* の役割について詳細な検討(とりわけ、『社会契約論』でのアソシエーション概念)をおこなっている。このような意味で、本書は私たちが常に立ち返るべき研究の一つと言えよう。Bruno Bernardi, *La fabrique des concepts : Recherches sur l'invention conceptuelle chez Rousseau*, Honoré Champion, 2006.

⁹⁾ *Physique* とは現在では「物理学」と訳されるのが通常であり、本稿でもこの訳語を採用するが、当時の用法から考えれば「自然学」という訳語のほうが適切な場合もある。

¹⁰⁾ Cité in B. Bensaude-Vincent, article « Chimie », dans *Dictionnaire européen des Lumières*, sous la direction de Michel Delon, PUF Quadrige, 2007, pp. 237-8. ここでの化学についての概説は、バンソード＝ヴァンサン執筆の本項目と大橋完太郎、『ディドロの唯物論 群れと変容の哲学』、法政大学出版局、2011年の第四部に負っている。

¹¹⁾ Christine Lehman, « Between Commerce and Philanthropy : Chemistry Courses in Eighteenth-Century France », in *Science and Spectacle in Enlightenment*, Eds. Bernadette Bensaude-Vincent and Christine Blondel, Ashgate, 2008, pp. 103-116.

ルエルの講義には、ルソー、ディドロ、チュルゴーらなど多くのフィロゾーフたちが参加していた。ドルバックも私邸にルエルを招き、ルエルから講義を受けていた。

このような知的状況の中、未だ錬金術、生物学、生理学、鉱物学、地質学、薬学などと未分化であった化学はどんなものであったのか。『百科全書』項目「化学」を執筆したヴネル (Gabriel-François Venel, 1723-1775) によれば、化学の目標とは「物理学が表面と外的形象しか知りえないような物体の内部まで入り込む」(Enc., III, 409b) ことである。物体がどのような構成要素によって成り立つのか、異なる物質同士を化合させると新たな性質を有する物質が生まれるのはなぜか、といった問題が化学の対象となる。

これらの議論は、「機械論的説明」だけでは理解することができない。すなわち、物質の質的な変化を議論しようとする場合、形状、延長、量といった物理学的概念では現象を説明できない。なぜ、異なる性質を持つ二つの物質を一つの物質に合わせ第三の物質を作ると、以前は持っていなかった性質をこの第三の物質は有するようになるのか。具体的物質の変化の観察(実験)をおこないつつ、物体同士の関係性を明らかにしようとする唯物論こそが化学なのであった。

物理学と区別された化学は、フィロゾーフにとってどのような意義があったのだろうか。この点を次節で検討する。

2. 生成の謎：化学がフィロゾーフに与えた「武器」

啓蒙主義の哲学的目標とは、一般的に二元論哲学を棄却し一元論哲学を打ち立てることにあつた。この点に関しては、カッシーラーの要約が的確である。

イギリスおよびフランスの心理学は単に一つの点でロックを乗り越えようと試みた。それらはロックの心理学の原理にまだ残っている二元論の最後の残滓を除去することによって、「内的」および「外的」経験の区別を放棄し、すべての人間的認識をただ一つの源泉に帰着させようと欲した¹²⁾。

¹²⁾ Ernst Cassirer, *Die Philosophie der Aufklärung*, Verlag von J. C. B. Mohr, 1932, S. 132. (『啓蒙主義の哲学 上』、中野好之訳、筑摩書房、2003年、169頁)

一元論を打ちたてようとした啓蒙主義のこの目論見は、認識論だけに限られたものではない。それは、道徳論、存在論にも当てはまる¹³⁾。この意味で、フィロゾーフたちにとって物理学、機械論は一元論的世界を描くための強力な武器となったのである。すなわち、物質と運動のみによって世界を記述しようとする唯物論、機械論哲学¹⁴⁾の完成を啓蒙主義のフィロゾーフたちは目指したのであった。

だが、物理学、機械論を武器として用い、自らの哲学理論を形成しようとした唯物論の立場をとるフィロゾーフたちは、一つの巨大な謎にぶつかることになった。その謎とは、〈生成の謎〉と呼ぶことが可能であろう。それは無機物から有機物への生成という謎である。どのように自発的な運動も意識も持たない単なる物体が生命へと生成変化するのか。

すなわち、「唯物論的一元論を成立させるためには、構成された物質が有機体となり、意識を持った存在へと変成していく過程を想定する必要があるし、そこにおいて、物質そのものにいわゆる生命が宿っているのか、あるいはいかなる契機によってどの段階から物質に生命が発生するのか、という点を説明しなければならない」¹⁵⁾。

この問いこそ、力学、機械論に専心していた十八世紀の唯物論者たちの関心を新しい学問である化学へ引き寄せていった理由である。ディドロ、ドルバックは共に自らの著作のなかでこの〈生成の謎〉と向き合っていた¹⁶⁾。

ダランベールは、『百科全書』項目「生成 GÉNÉRATION」にて以下のように

¹³⁾ 古茂田宏、「学説の体系性と歴史性——ルソーの認識論を手がかりにして——」、『思想史の意義と方法』、以文社、1982年、102頁。

¹⁴⁾ 以下は、ダランベール執筆による『百科全書』項目「機械論的 (MÉCHANIQUE)」の記述の一部である。「機械論哲学 (Philosophie mécanique) とは、以前は粒子論哲学と呼ばれていたものと同じものである。つまり、自然の現象や物質的実体の作用を機械論的な諸原理——すなわち、自然的物体を構成する諸部分の運動、重さ、形象、配列、配置、大きさあるいは小ささ——によって説明する哲学である」(Enc., X, 223a)

¹⁵⁾ 大橋、前掲書、228頁。

¹⁶⁾ 本稿では紙面の関係上、ダランベールとドルバックに限って議論を展開しているが、ディドロの唯物論、化学論については先の注で挙げた大橋完太郎著『ディドロの唯物論 群れと変容の哲学』にて言及されている。大橋によれば、ディドロも〈生成の謎〉の解決のために化学に依拠していた。大橋、前掲書、第四部第一章参照。

記述している。

物理学 (Physique) における生成とは、一般に以前には存在していないものを生み出す行為をいう。あるいはより正確に言えば、ある物体から他の物体への変化であり、この他の物体には先行する状態のいかなるものも保存されていないことをいう。というのも、厳密に言えば、新しい部分を生み出すことは少しも生成において想定されているのではなく、部分の新たな変容だけが想定されているからである。以上のことから、生成とは私たちが創造と呼ぶものと異なるのである。項目「創造 (CRÉATION)」を見よ。(Enc., VII, 558a-558b)

「以前に存在していないもの」を生み出す行為、作用が生成と定義されている。アリストテレスの『生成消滅論』の議論をダランベールが踏まえていることは明らかである。ダランベールは続けてこの生成の謎について語る。

概して、物体の生成とは自然が秘密にしている謎である。どのように物体が生み出されるのかを知るためには、私たちの理解の範囲を超えた問題を解決せねばならないだろう。何らかの物体——例えば、植物——の諸部分は石のような他の物体の諸部分と異なるかどうかを知らねばならないだろう。その答えはこうである。人々が望むようには、有機的な植物の構成的諸部分から石を作ることは決してできない。あるいは、あらゆる物体の諸部分、物体を構成する第一要素は同じものであるのか、そしてその配置の多様性のみによって私たちが見る異なる物体を生み出すかどうかをも知らねばならないだろう。(Enc., VII, 558b)

植物から石への変化の可能性がここでは問われている。鉱物、植物、動物という三つの界での移行、すなわち、ある界から他の界への〈生成〉はありえるのだろうか、とダランベールはこの項目で自問している。しかし、彼の力ではこの問いに答えることができなかった。項目「生成」の最後は、諦めの言葉で締め括られている。「この主題について体系をつくり、際限のない推論や偉大な論述をなすこともできるだろう。だが、それらは私たちに何を教えてくれるのだろうか。それらは何も教えてはくれないのだ。」(Enc., VII, 558b)

項目「生成」は「物理学 (Physique)」に分類されていることに注意しよう。

デカルト以降のあらゆる学問領域において信頼されていた物理学の挫折を、このダランベールが執筆した項目のなかに見ることができる。数学的-機械学的な量的モデルによって世界を記述しようとすることを目指す物理学において、静的なモデルを描くことは可能であろう。だが、植物から石の生成やあるいは植物そのものの生成の問いといった質的変化の議論は、物理学の射程範囲から外れたものとなってしまふ。このような意味において、ダランベールは項目「生成」のなかで物理学の敗北を認めていたのであった。

生物の生成を巡る前成説（*préformisme*）と後成説（*épigénèse*）の論争や、万物の生成における神の立ち位置を巡る理神論の戦い、無神論哲学の展開といった十八世紀フランスに起きた様々な主義主張はこの〈生成の謎〉につきまとわれる結果となる¹⁷⁾。

この〈生成の謎〉を解き明かすことをフィロゾーフたちに期待されていたのが、新興の学問であった化学なのである。ドルバックは、機械論哲学が抜け出せなくなった〈生成の謎〉を解決してくれるよう、化学に多大なる期待を寄せていた。なぜならば、機械論哲学だけで無機物から有機体への移行を語ろうとすると〈神〉を想定せねばならなくなってしまふからである。それゆえ、「神的な創造という概念」¹⁸⁾を棄却する無神論哲学を打ちたてようとするドルバックにとって、この問題は喫緊の課題であった。

それゆえ、物質はそれ自体で存在し、その固有のエネルギーによって活動し、決して消滅しないことを認めよう。物質は永遠であり、自然は過去も現在も未来もつねに産出し、破壊し、作り、また壊し、自己の必然的存在から帰結する諸法則にもっぱら従っている、と言おう。自然は何をおこなうにも、引き付け合い、斥け合い、衝突し合い、結合し、遠ざかり、近づき、集まり、離れるような本質的に多様な要素と物質を組み合わせる（*combiner*）だけでよい。こうして、自然は植物、動物、人間を出現させる。すなわち、器官を備え、感覚し、思考する存在を、感覚

¹⁷⁾ ライプニッツ『弁神論』やシャルル・ボネ（Charles Bonnet, 1720-1793）の『有機体論』（1762年）において、生物の発生論として前成説が採用されていた。前成説を採用するボネの有機体論については以下の文献が詳しい。飯野和夫、「シャルル・ボネの有機体論」、『人文学報』、東京都立大学人文学部、第151巻、1982年、147-173頁。

¹⁸⁾ 大橋、前掲書、247頁。

と思考を欠く存在と同様に出現させる¹⁹⁾。

ドルバックは、物質と物質の要素（元素）を「組み合わせる」だけで生命を誕生させることができると考えていた。この「組み合わせる」という操作こそ「化学」の操作である。「化合（*combinaison*）とは、異なる本性を有する二つあるいは複数の原質の化学的な結合を説明する包括的な言葉である。化学者たちはしばしば混合（*mixtion*）という語を同じ意味で考えている。混合（*MIXTION*）及び原質（*PRINCIPES*）を見よ」（*Enc.*, III, 664b）とヴネルが述べているように、「化合」とは化学的操作を意味する用語であった。このように、ドルバックの唯物論は物理学、機械論、化学の折衷から成り立っているのである。

『自然の体系』が1770年に出版される以前に、ドルバックは1751年から60年の間、ドイツの化学や鉱物学の翻訳に従事していた²⁰⁾。また、1757年にはルソーとドルバックの間に「化学の原稿の同意」があったようである²¹⁾。この原稿が『教程』を指すのか、なんらかの書籍の訳本を指すのかは判断できない。しかしながら、ドルバックとルソーの間にも化学という共通言語があったことは確かである。それでは、ルソーはどのように化学と接していたのだろうか。次節でこの問いを検討しよう。

3. ルソーは化学と決別したのか？

『教程』を書いた後、『学問芸術論』にて論壇デビューを果たしたルソーは、化学だけではなく科学一般（*sciences*）を放棄したように見える。というのも、『学問芸術論』『人間不平等起源論』にて、学問技芸による人間の墮落、すなわち人為による自然（本性）の破壊がルソー哲学のひとつ大きなテーマとなっているからだ。

しかし、『学問芸術論』以降、ルソーは人為を単純に「悪」と見なしたわけ

¹⁹⁾ D'Holbach, *Système de la nature*, t. 2, Fayard, 1990, p. 171. (『自然の体系 II』、高橋安光・鶴野陵訳、法政大学出版局、2001年、120頁。一部改訳した。)

²⁰⁾ Pierre Naville, *D'Holbach et la Philosophie scientifique au XVIII^e siècle*, rééd., Gallimard, 1967, p. 185.

²¹⁾ *Confessions*, OC I, p. 461. ルソーからの引用はプレイヤー版全集 (*Œuvres Complètes de Jean-Jacques Rousseau, Bibliothèque de la Pléiade*) に基づき、引用する際は OC と略記し、作品名、巻数、頁数を示す。

ではない。例えば、『社会契約論』の草稿である『ジュネーヴ草稿』には以下のような記述が見られる。

人間の欲求が拡大し、その能力をもっても〔欲求を〕満たすことができなくなり、人間の欲求の対象範囲が広がって、数が増すとともに、人間は一つの選択を迫られる——すなわち永久に不幸なままにとどまるのか、それとも新しいものを発見し、そこからみずからのうちには見出すことのできない手段を手に入れるかのいずれかなのである。

われわれの生存に有害な障害が巨大なものとなり、個人がこの障害を克服するために利用できる力よりも、この障害の抵抗力が強くなると、原初状態 (*l'état primitif*) はそのままでは維持できなくなり、技術 (*l'art*) が自然を救いに来ない限り、人類は滅びるだろう²²⁾。

『人間不平等起源論』で展開された自然状態から社会状態への不可避の移行を経験した人間たちは、生き残りを図るために「技術 (art)」、すなわち人為に賭けなければならない、とルソーは主張していた。デニーズ＝チュニーが指摘しているように、ルソーは自らの思想体系の中で自然と対置される〈人為〉に対して両義的な価値を与えているのである²³⁾。

それゆえ、私たちは次の問いに答えなければならない。すなわち、なぜルソーは化学から遠ざかったのか、という問いである。『教程』の決定稿を用意していたルソーが、その成果を放棄するに至った理由はなんだったのか。この問いに答えることは、ルソーの自伝的問題に答えるだけではなく、ルソー哲学の核心に迫るために必要不可欠なのである。

ルソーが化学から離れた理由として、これまでの研究では〈信仰〉がその理由として挙げられてきた。M・ベレッタは、ルソーが学問の進歩によって信仰が墮落することを嘆いている文章を引用し、化学からの離脱を説明する。

現在、学問はさかえ、文学と芸術が、私たちの間に輝いています。宗教はこのような事態から、どんな利益を得たでしょうか。無宗教を誇りにしているあの哲学者の大群に、この問いを提出しましょう。私たちの図

²²⁾ *Manuscrit de Genève, OC III, p. 289.*

²³⁾ Cf., Anne Deneys-Tunney, *Un autre Jean-Jacques Rousseau : Le paradoxe de la technique*, PUF, 2010.

書館は神学の書でいっぱいであり、詭弁家は私たちの中にたくさんいます。かつては、聖者はいましたが詭弁家はいませんでした。学問は広まり、そして信仰は絶滅してしまいました²⁴⁾。

このルソーの嘆きを、ベレッタは「フィロゾーフたちの大義を守るために、特に絶対的な無神論の基礎を築くために徴兵された」化学者への嘆きだと見る²⁵⁾。すなわち、機械論哲学では解決できない〈生成の謎〉の突破口を切り開くものとして化学にドルバックやディドロが期待することで、化学は無神論哲学を打ち立てるための必要な学問になってしまう。そこに、ルソーが異議を唱え、化学という学問から身を引いた、とベレッタは解釈した。

ルソーがドルバック一派から 1757 年頃から離れていった理由について、それは信仰の問題であったということは、これまでも指摘されてきた²⁶⁾。しかし、この解釈では、ルソー思想の根底には、まずもって信仰、宗教の問題が何よりも先んじて存在せねばならない、という前提を必要とする。確かに、ルソーは上で引用したような学問が進歩すると信仰が消滅するという反比例関係を指摘し、信仰を擁護しているように見える。だが、信仰が哲学に先行するというルソー解釈を無前提に受け入れてしまうことは、ルソー哲学、より厳密に言えばルソーのエピステモロジーといったものを丹念に抽出する契機を失ってしまうだろうし、実際、これまで丹念に彼のテキストからそれが抽出されることはなかった。ドルバック一派や百科全書派とのルソーの決別を特定のある出来事、彼の個人的な感情、信条に還元して解釈することで、失われるものは大きい。

それゆえ、次の節では失われてきたルソーの哲学の再構成をおこなう。ここで必要不可欠なテキストこそが『教程』なのである。

4. ルソーのエピステモロジー

ここで、エピステモロジー (épistémologie) という言葉を使いたい。通常、

²⁴⁾ *De Jean-Jacques Rousseau, de Geneve. Sur la réponse qui a été faite à son Discours, OC III, p. 48.*

²⁵⁾ Marco Beretta, « Sensiblerie vs Mécanisme. Jean-Jacques Rousseau et la chimie », dans *Corpus revue de philosophie*, n° 36, Paris X Nanterre, 1999, p. 119.

²⁶⁾ 小笠原弘親、「ルソーと『ドルバック一派』——対立の諸相——」、『大阪市立大学法學雑誌』、第 40 巻、4 号、1993 年。

この言葉は「科学的認識論」と訳され、バシュラール、カンギレムといった科学哲学において主に使われる概念である。エピステモロジーを「科学を形成する知的営為を、科学の歴史的な生成過程を分析し、科学の方法論とその背後にある思想的なひろがりをもつことを明らかにする知的営み」²⁷⁾と定義できるならば、「ルソーのエピステモロジー」という表現を用いる際に、私たちは何を了解しようとするのか。それは、ジャン＝ジャック・ルソーという感情的人間、自然を愛する人間、パリに対する敵意を抱き続けた人間からどこまで〈科学的な〉認識論を提示、抽出できるのか、という問題意識の表明なのである。ルソーの哲学と言った場合に、その理論的帰結だけを再構築し、共和主義者ルソー、革命主義者ルソー、理神論者ルソーという多様なルソー像を描くのではなく、彼の理論的生成過程に立ちあわねばならない。それゆえ、私たちは啓蒙主義に対して用いるにはややアナクロニズムとも思える「エピステモロジー」という言葉を用い、ルソーの「科学の方法論とその背後にある思想的なひろがり」を明示しなければならないのである。

したがって、私たちがここで参照すべきテキストは忘れ去られたルソーのテキスト『教程』なのである。化学という新興学問についてまとめられたこのテキストを読み込むことで、フィロゾフたちとどの点でルソーは異なるのか、どうかを検証することができる。

とりわけ、本稿ではその第二編第一章「自然のメカニズムについて (Du mécanisme de la nature)」をその読解対象とする。この箇所が『教程』の中で、もっともルソー独自のエピステモロジーが姿を現すテキストである。

まず、この章において、ルソーは唯物論的一元論者たちが拘泥していた〈生成の謎〉に対する立場を表明する。まずは、その点を確認しよう。

諸々の天体は、みずから運動する。だがそれが、一体何のうちで、またどの原理によって〔運動しているのかを〕私たちは知らない。太陽は、毎日私たちに恵み深い日光を送る。それは地上で、生命と運動とを維持するためである。そして太陽がないならば、自然の中のあらゆるものが消滅してしまうのである。しかしながら、宇宙に存在する太陽、全天体、

²⁷⁾ 近藤和敬、「カヴァイエスの問題論的観点からみた科学的構造の生成——来るべきエピステモロジーのために」、『VOL05 特集エピステモロジー——知の未来のために』、金森修・近藤和敬・森元斎編著、以文社、2011年、18頁。

あらゆる火、あらゆる運動は、全植物の内のたった一握りをも、また全昆虫の中で最も卑しいものをも創り出すことはできないのである。生成に関するこの深淵の中で、哲学者たちは、あまりにも長く道を見失っていた。そしてこの深淵は、今日もなお、不信の徒の悩みの種 (*le désespoir des incroyants*) なのである。組織された物体 (*un corps organisé*) を運動の法則だけで構築することなど、幻想である。このような幻想は、言葉〔を弄ぶこと〕によって満足する人々にお任せするしかない²⁸⁾。

ここで、〈生成の謎〉に対する不可知論者ルソーが姿を現す。天体の運動の原理を私たちが知らないことを述べた後、ルソーは生命誕生の原理も知らないと主張する。「生成に関するこの深淵 (*abîme de la génération*)」こそ、ダランベールが挫折し、ドルバックが化学に救いの手を求める理由となった〈生成の謎〉である。機械論哲学が用いる基本的原理である「運動の法則」によって「組織された物体」、つまり生命を誕生させることはできない、とルソーは喝破する。続いて、ルソーの言葉を辿ると、私たちはやはりルソー思想における信仰の絶対性に同意せざるを得ないと結論づけたくなるような箇所と遭遇する。

叡智的な存在者 (*Un Être intelligent*) は、あらゆる事物の能動的な原理である。このことを疑うためには、良識を放棄しなければならない。そして、これほど明白な真理の証拠を挙げるなどということは、明らかに時間の無駄である。疑いなくこの永遠の存在は、その力と意志とを直結させ、両者の協同 (*concours*) によって宇宙を創り出し、維持することもできたであろう。だが、このことにも増して、一般的な法則を自然〔という機械〕のうちに設定したということが、むしろ永遠の存在の叡智の名に値するのだ。そしてこのような諸々の法則は、決して互いに矛盾せず、その効力はただそれだけで世界とその内にあるものとの維持してゆくのに十分なのである。これらの法則それ自体が、そしてこれらをきちんと管理している誠実さが、立法者 (*le législateur*) 〔叡智的な存在〕を

²⁸⁾ *IC*, p. 100. 傍点および〔 〕内は引用者。なお、『教程』の訳文は、飯田賢穂との共訳である。現在、月曜社 WEB サイトにて、筆者と飯田による『教程』抄訳及び解説連載をおこなっている。今後、月曜社より単行本の刊行を予定している。

見誤る誤謬に満ちた精神を生み出すなどということが〔一体どうして〕考えられようか。〔このような精神が言うには〕物質は従う、ゆえに誰も命令してない〔ということらしい〕。これら奇妙な推論を始終なすことなしに、無神論に陥ることは不可能である²⁹⁾。

「叡知的な存在者」とは、〈神〉を意味していることは確かである。この文章は、後のテキストである『サヴォワ助任司祭の信仰告白』を私たちに想起させる。というのも、そこでルソーは運動を「伝えられた運動 (*mouvement communiqué*)」と「自発的な運動 (*mouvement spontané*)」の二つに分類し、物体の自然状態が静止であるとするならば、被造物に運動と生命を与える創造主の存在を認めなければ不条理に陥るとして、この最初の原因たる創造主がルソー（助任司祭）によって認められる。そして、この命題は「わたしの第一の信条 (*mon premier article de foi*)」として定位される³⁰⁾。

ここに、ルソーの理神論を見ることは十分に可能であるし、ベレッタと小笠原が指摘した哲学に対する信仰の優位を見ることもできる。あるいは、H・グイエが結論づけたように『信仰告白』で展開されたデカルト的二元論への回帰を見ることもできるだろう³¹⁾。

しかし、ここから直接的にルソーが化学から離脱した理由と考えるのは性急な議論である。というのも、〈生成の謎〉に回答を示す可能性を感じて、ドルバックやフィロゾーフたちは化学に近づいていったのではなかったか。したがって、ルソーがこの問題を放棄してしまうとするならば、彼は化学に対して何を期待し、何を賭けて『教程』を執筆したのだろうか。この点を明らかにせねばならない。

ルソーは『教程』全編を通して、これまでの化学の用法に対して批判を加えていく。第一編第一章「物質の原理について」では、万物を構成すると言われていた「賢者の石」を探求するための錬金術的な化学の在り方を批判する³²⁾。そして、化学はまずもって「分析 (*analyse*)」のための学であるという

²⁹⁾ IC, pp. 99-100.

³⁰⁾ *Profession de foi du vicaire savoyard*, OC IV, pp. 574 et suiv.

³¹⁾ Henri Gouhier, « Ce que le vicaire doit à Descartes », *Les méditations métaphysiques de Jean-Jacques Rousseau*, J.Vrin, 1970, pp. 80 et suiv.

³²⁾ IC, pp. 59 et suiv.

ことがここで確認される³³⁾。そして、第二編第一章では、〈生成の謎〉の問いが放棄される。

これらの観察は、私の探求が先ず立つべき出発点を、十分に示してくれる。私は、天体が自らの軌道上を進む原因を見つけようと苦心することは決してないであろう。また私は、植物や動物の形成を機械論や静水力学の原理 (*principes de la mécanique ni de l'hydrostatique*) に結びつけようとしめないであろう。さらに、自分の技術を色々と操作することによって、一人の人間を作ろうとした狂気の化学者を真似ることもないであろう³⁴⁾。

ルソーはここで、何度も繰り返し述べてきた天体の運動の問題と生命の形成の問題の二つの探求目標を棄却する。かつ、『信仰告白』でも大きく批判された「人間を作る」という目的も棄却する³⁵⁾。物理学、機械論、化学などの科学 (*sciences*) を用いて現象の原因を探求することはルソーにとって問題ではなかった。それは人間にとって認識不可能なものであり、〈神〉のようなものを想定するしかない、とルソーは言う。

それでは、化学という名で人間にできることはなんであるのか。それは〈起源の探求〉だとルソーは言う。「自然的な事物の、原因 (*cause*) とまではいかなくとも、少なくともその起源 (*origine*) を探求しようとすることは、よ

³³⁾ この点に関しては、拙稿「なぜルソーは「分析」を批判したのか?——ルソーの『教程』についての試論」、『フランス哲学・思想研究』、日仏哲学会編、第16号、2011年、106-114頁を参照。

³⁴⁾ *IC*, p. 101.

³⁵⁾ 「証拠がなければ、人間の不条理がこの点にまで推し進められると信じることができるだろうか。アマトウス・ルシタヌスは、ジュリウス・カミルスが第二のプロメテウスのように錬金術の知恵によって作りだされた1プースの背の小人を試験管のなかで見たと言っていた。パラケルススは、『物体の本性について』のなかで、この小人を作り出す方法を教え、小人族、牧神、半獣神、そしてニンフなどは化学によって生み出されたのだと主張している。事実、これらの事実の可能性を打ち立てるためには、有機的物質が火の熱に耐え、その分子は反射炉のなかでも生きつづける、ということを実証することのほかに、まだしなければならないことが残っているというのは、わたしにはあまりよくわからない」 *Profession de foi du vicaire savoyard*, *OC IV*, pp. 579-80.

り有益であるかもしれない」³⁶⁾とルソーは控え目に語っているが、ここでルソーが対決しているのは、デカルトであり、ニュートンであり、同時代のフィロゾーフたちである。体系を作り、原理を作り、そこから因果論的に〈生成〉を語りだす彼らの身振りをルソーは拒否する。

〔叡知的な存在者が打ち立てた〕これらの法則のうち、どれが第一のそして最も一般的な法則であるかを決定するためには、宇宙の構造 (structure) をいままで以上に知らなければならない。これらの法則は、もしかしたら唯一の法則に還元されることもあるのかもしれない。このことを思い立ったひとは、決して少なくない。そしてニュートンは、引力という原理だけで、自然の現象のすべてをほとんど説明してしまった。私たちは、宇宙の動因が運動であるということをよく知っている。運動が、あらゆる物事に共通して働いているということを、またそれなしでは何も生じず、それが物質に実に多くの様態を与えることができるということをよく知っている。ところでデカルトは、この唯一の原理〔運動〕から、全宇宙の生成を引き出すことができると主張した。彼は、馬鹿げたことをもとに特異な体系を構築した。そして彼は、意図せずして、唯物論者たちに武器を提供してしまった。この唯物論者たちはたとえば、〔彼らの体系にとって〕必要不可欠な運動を物質の属性にしてしまうことによって、物質を〔彼らの〕カミサマに祭り上げたのである。このカミサマが世界を創造し維持しているというわけだ³⁷⁾。

ルソーの批判を引用することはこれ以上やめて、ルソーの意見、立場を詳述しよう。だが、その立場を見て、私たちは肩透かしを食らうかも知れない。その立場とは「これら極端の間にある中庸の道を賢くもたどること」³⁸⁾である。折衷的な香りを感じざるを得ないが、その中身を検討しよう。

まず、「両極」にあるものとは何か。一方の極は、現実とはそぐわないような「体系 (Système)」を作ってしまう立場であり、他方経験観察のみに専心し、理論を構築しないような立場を意味する。言うなれば、体系主義 (デカルト) と観察主義 (ニュートン) の間の道をルソーは進もうと宣言している

³⁶⁾ IC, p. 99.

³⁷⁾ IC, p. 100.

³⁸⁾ IC, p. 99.

のである。ルソーによれば、体系主義者とは唯物論的機械論者を意味する。彼らは「すべてを機械学 (*mécanique*) の法則に従属させただけでなく、これらの法則それ自体とそのすべての働き (*effets*) とを説明すると吹聴し」たが、常に彼らの体系からは「矛盾、例外、新しい発見」が生まれてしまう³⁹⁾。それゆえ、彼らの理論は現実を反映したものではなく、「空中樓閣」でしかない。反対に、実験自然学 (*physique expérimentale*) を採用する者たちは、「原因などまったく知らない、それを説明しようなどとは決して望まない」という立場を取るが、仮説も現象の説明もしないため、結局は引力や求心力 (*forces centripètes*) といった無意味な概念の構築に回帰してしまうのである。

したがって、ルソーが化学論において目指そうとする「中庸の道」とは以下の立場である。

〔観察によって〕自然の聖域へ忍び込み、そこで一般的な法則を探してみよう。また、つねに経験に導かれながら、力の及ぶ限り事物の真の原理へと近づいてみよう。とはいえ、私たちの私的な臆見 (*nos propres opinions*) によって、盲目になってしまうことなどないようにしよう。〔法則が〕経験に対立しているように見えたとしても、頑なになってはならない。また、最も崇高な思弁と最も驚嘆すべき発見の〔いずれに〕よっても、自然の真の理論なるものを明晰に認識することなど決してできはしないと思ったとしても、頑なになってはならない⁴⁰⁾。

理論と観察 (実験) の絶えざる往復運動をおこなうことで「真の原理」へと近づくことがここでは提案されている⁴¹⁾。

そして、ここまで細心の配慮をもって語られてきた科学的な手法をルソーが宣言した次の瞬間に、私たちは先に検討した「叡知的な存在者」のくだけり

³⁹⁾ *IC*, p. 98.

⁴⁰⁾ *IC*, p. 99.

⁴¹⁾ 今日の方法論で言えば、分析哲学や倫理学において用いられる理論修正の技法である「反照的均衡法 (*method of reflective equilibrium*)」に近い。これはジョン・ロールズが『正義論』の中で使用した理論の修正方法である。もっとも、ロールズより先にネルソン・グッドマンによってこの方法は定式化されていたようだ。この方法については、以下の文献を参照。伊勢田哲治、「広い反照的均衡と多元主義的基礎づけ主義」、『*Nagoya Journal of Philosophy*』、第五巻、2006年、29-53頁。

に出会うのである。この「叡智的な存在者」とは〈神〉の表象ではある。しかし、それはまさに『言語起源論』に登場する「地軸を傾ける者」と同じ存在者である⁴²⁾。自然状態から社会状態への移行の原因に関して、とりあえずの原因の役割を担う者としての〈神〉なのである。同様に、無機物から有機体への移行も「人間の精神にとって謎 (abîme)」⁴³⁾なのであり、それゆえ、〈神〉がこの謎の中に消極的に措定されているのである。この謎としての「原因 (cause)」は〈神〉に帰して、我ら人間たちが明らかにすべきは事物の「起源」なのである。ルソーはこのように考えていた。それゆえ、以後『教程』のなかでルソーは、生成の問題ではなく、自然の様々な現象の模倣を目指す⁴⁴⁾。

ディジョンアカデミーの「人間の不平等の原因は何であるか？」という原因論の問いをルソーは「不平等の起源は何であるか？」という形で起源論に書き換えた。この単語の書き換えは、単なるルソーの書き間違いではない。

『教程』を検討してきた私たちにとって明らかであるだろう。「自然的な事物の、原因 (cause) とまではいかなくとも、少なくともその起源 (origine) を探求しようとすることは、より有益であるかもしれない」という『教程』におけるルソーのエピステモロジーは、『不平等起源論』でも生きていた。

両『起源論』での人間存在の変化の問題、すなわち自然状態から社会状態への移行の問題について、ルソーはその直接的な原因を指し示そうとはしていない。社会状態の特徴をなす所有や音声言語の発生について、ルソーは自然人が「思いついた (s'aviser)」ことにして⁴⁵⁾、その発生の直接的原因を語ることはしない⁴⁶⁾。それゆえ、ルソーは同時代の博物学的知見、旅行記、自分自身の内心の感情といった様々な素材を用いて『不平等起源論』を構築した。

42) 「人間が社会的 (sociable) であることを望んだ存在が、地球の軸に指でふれ、それを少し傾けて宇宙の軸に合わせたのである」 *Essai sur l'origine des langues*, OC V, p. 401.

43) *Profession de foi du vicaire savoyard*, OC IV, p. 580.

44) 例えば、自然界での水の循環及び植物、動物における体内での養分の動きを「消化、分解、濾過、発酵、石灰化、そして化学のみが模倣できるあらゆる働き」から明らかにすることをルソーは目指す。IC, p.102.

45) *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*, OC III, p. 148 et 164.

46) ルソーの「起源」概念については、拙稿、「ルソーの歴史認識における『起源』概念について——コンディヤックとビュフォンを通じて」、『一橋社会科学』、第二巻、2010年、7-19頁を参照。この論文では、ルソーのエピステモロジーをビュフォンの地質学のそれに引きつけ検討した。

結論しよう。ジャン＝ジャック・ルソーは化学から離れてしまったのだろうか、という問いに私たちは否、と答えることができる。だが、それは『学問芸術論』以降、ルソーが実際に化学の実験をおこない、化学理論の彫琢に励んでいたということ意味するのではない。

そうではなく、これまで見てきたように、『人間不平等起源論』『言語起源論』といった作品において『教程』の中で展開されたルソーの思考はそれらの作品の理論的基礎になっているのである。すなわち、ルソーのエピステモロジーは後年の作品において通底している。その一端を本稿では明らかにした。ルソーの理論的著作を支えるエピステモロジーは『教程』の時代に育まれた。そして、ダランベール、ドルバックといったフィロゾーフたちと共に、ルソーは自らの立場を明確化し、化学研究をおこなっていた。

おわりに

物理学、機械論を自らの理論的支柱としていた唯物論者であったフィロゾーフたちは、〈生成の謎〉を解くために化学に近づいていった。だが、ルソーはその謎の解決のための糸口として化学を捉えることはなかった。むしろ、ルソーの化学論には、一つのパースペクティブの転回が存在する。すなわち、因果論的な思考から起源論的な思考への転回である。

際限のない理論と観察の往復運動によって、究極的な原因を究明するとまではいかなくとも、起源というカッコつきの〈物語〉を描く可能性にルソーは賭けていた。そして、このエピステモロジーはルソーが化学研究から遠ざかったのちも、政治的作品の理論的基礎として存在している。

本稿では、〈生成の謎〉を巡るフィロゾーフたちの言説空間の一部から出発して、それに対するルソーの反応を検討してきた。十八世紀啓蒙思想の醍醐味とは、まさにこの彼らたちが共鳴し、かつ対立し合う「言説空間」の豊穡さである。ただひとりの思索によって練り上げられた思想ではなく、同時代の「言説空間」から多面的に生み出される思考こそを私たちは読みとらねばならない。

(ふちだ・まさし 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)

※本稿は日本学術振興会平成23年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。